

想像・創造される場としてのプロテスタント教会

山田 政信

ブラジルやペルーからのデカセギが一九九〇年以降に日本国内で設立したプロテスタント教会は、リーマンショックの影響を受けながらも現在もお東海地方を中心に活発な運動を続けている。帰国した信者の中には日本にあるエスニック教会との関係を維持しながら新たに教会を開いたり、かつて所属していたか、新たにメンバーになった教会で活動が続けようとする人がいる。しかし、その一方で信仰活動から離れる人も少なくない。複数の「故国」を持つことになった越境者としての彼らの存在、また彼らが新しく創造する教会という場は、ホスト社会およびホームランドという二つの空間においていずれも逸脱的な場合がある。

日本に住むブラジル人には、在留資格の合法性から二国間の越境を何度も繰り返すケースがみられるが、そのような人々のみならず、一度でも越境を経験した人にとって「ホームランド」は決して自明の記憶でなく、選択されるイメージとして受け止められることがある。日本でブラジルへのノスタルジーを吐露するブラジル人は少なくなく、日本のブラジル系プロテスタント教会信者の入信理由でも母国の家族や友人へのノスタルジーを挙げる者が散見する。また、ブラジルに帰国したのちも、日本での教会活動を懐かしく思い、そのイメージを追い求めようとする人がある。日本とブラジルの両国で、このような体験をする人々は、ホスト社会およびホームランドの両方で二重のノスタルジーを抱く存在になっており、それぞれの地で

「居心地の悪さ」を感じ取る越境者だといえる。とはいえ、こうしたノスタルジーが彼らの信仰活動を促すことがある。記憶の中のあの場所が、ここにあれば今頃どうだったろうと想像し、そこに生み出されるノスタルジーの帰結として教会(活動)を創造するのである。

フレッド・デーヴィスは、『ノスタルジアの社会学』(一九九〇)で「ノスタルジアの体験が持続するための滋養分をどれほど過去の記憶から引き出してこようと、われわれがノスタルジアを感じるきっかけとなる要因はやはり現在のなかに存在しているはずである」という。つまり、ノスタルジーは単に「過去」を振り返る感情に留まらず、われわれを現在に定位させるためのものである。「ノスタルジアが現在の自己に対し「あの頃と同じ」なのだ、…行く手に待ち受ける恐怖や不確実性を完全に克服できるのだと元気づけることによって、アイデンティティの連続」(デーヴィス)を増進させるのである。

ノスタルジーは、個人のアイデンティティのあくなき追求、生の体験の混沌の中から自己を救い出そうとする試みに関わっており、人生における連続と非連続の衝突の中で、連続への願望を与え、過去への恭順によって慰めを与える。デカセギを体験する(した)越境者らは、ホスト社会とホームランドの両方で不測の事態や社会変化に晒され、未来の事故への不安や懸念に駆られやすい。ノスタルジーは個人レベルのみならず集合レベルに作用することによって、彼／彼女らの連続感を取り戻し、新たな宗教実践を促す原動力ともなる。その時、教会や家庭集会は、アイデンティティに衝撃を与えるような変化を体験

した人々が、自身の否定的感情と漠然とした不満や不安の幾分かを互いに排出させることができる、新たな「記憶」を共有する場所となる。

デカセギの教会は、グローバル化された新自由主義経済の産業構造という「悪魔のひき臼」に投げ込まれた越境者が、ホームランド／ホスト社会、過去／現在、現在／未来という連続と非連続の衝突の中で重層的に感じ取ることになる、ノスタルジィが積極的に作用するところに創造される場所であるともいえるだろう。

パネルの主旨とまとめ

藤野 陽平

本パネルでは移民と宗教に関する問題において、移民集団がもつホームランドへのノスタルジックな感情の諸相を提示した。移民にとってホームランドが特別な意味を持ち、宗教が移民たちの抱くホームランドへのノスタルジアを充足させるという事態は、ごく一般的にみられるが、実際のホームランドへの意味づけのされ方は、それぞれの社会のもつ文脈や各宗教の性格によって多種多様である。そこで本パネルでは、こうした場におけるホームランドの意味づけをエスノグラフィックに描き出すことで、その様態を明らかにすることをめざした。こうした研究を通じて、グローバル化が進む現代社会において、移民をめぐる宗教的状况に肉薄することができる。

第一の高橋典史報告では〈ホームランド〉と〈ノスタルジィ〉を鍵概念として、移民と宗教の特徴を検討した。前半部で

は理論的な整理を行い、パネル全体の要点を説明した。後半部ではハワイの事例から、現地の日系仏教関係者たちの〈ホームランド〉への〈ノスタルジア〉に関わる言説分析から、移民の宗教が供給する集合的なアイデンティティの変遷の一例を、「世代」の問題に着目しつつ示した。第二の藤野陽平報告では台湾においてキリスト教系団体が日本人妻に対して行っているケアについて報告した。戦前戦後の混乱から、本人の意思に関わらず台湾で暮らすこととなった日本人女性をとりまく環境を確認した上で、彼女たちにとって故郷である「日本」とは何であり、それにキリスト教がどのように影響しているのかについて考察した。

第三の川崎のぞみ報告では在日ムスリムに典型的な、パキスタン人の父と日本人の母を持つ女性のライフストーリーから、ハーフである第二世代の信仰の形成過程について報告した。母国のジェンダー規範を求める父親と日本の学校の均質性のいずれにもなじめない彼女が、イスラームの信仰を内面化することで両者を受容可能にしていることを示した。最後の山田政信報告ではブラジルやペルーからのデカセギが国内で設立したプロテスタント教会について検討した。そうした教会はリーマンショックの影響を受けながらも現在もお東海地方を中心に活発な運動を続けている。一方でブラジルに帰国した信者の中には日本にあるエスニック教会との関係を維持しながら新たに教会を開いたり、かつて所属していた教会で活動が続けようとしたりする人がいる。しかし、複数の故国を持つことになった越境者としての彼らが想像・創造する教会という場は、ホスト社会